報　告

食と農を通しての環境教育（2）

―大都市における市民活動の一例（その2）―

石田　康幸
埼玉大学教育学部

Enviromental Education through the Food and Agriculture (2)

—A Case of the Movement by Citizens in Large City (Part2)—

Yasuyuki ISIHDA
Faculty of Education, Saitama University

KEY WORD: enviromental education, organic farming, food and agriculture, citizens in large city
（受付日　1994年5月19日　受理日1994年7月12日）

1．はじめに

前報[3]では，「無農薬の野菜を食べたい，子孫に健やかな生命ときれいな自然環境を残したい」などの思いをもって，東京都大田区で様々な活動を行っている「いのちとくらしを守る会，略称“いのくら”」の活動の概略を紹介するとともに，これらの活動の環境教育的意義や問題点について検討した。本報では昨年実施された，「北志賀リンゴ狩りツアー」と名付けられた会員と生産者との現地交流会の実践例を中心に，消費者と生産者の親身な交流の意義と生産者，消費者相互に及ぼす環境教育的影響について考察する。

なお，本報を取りまとめるに当り，安中正行・知子夫妻には貴重な資料等を，佐藤正子氏には写真の一部をそれぞれ提供していただいた。さらに山田裕通，阿部真起子，神宮司聡子の各氏をはじめ，いのくら会員の皆さんに種々御援助いただいた。これらの諸氏に対し，記して感謝します。

2．「リンゴ狩りツアー」の概略

「晩秋の北志賀リンゴ狩りツアー」は，1993年11月13日～14日に，長野県下高井郡山ノ内町夜間瀬の畔上（あぜがみ）邦夫・のり子夫妻所有のリンゴ園を中心に実施された。

「いのくら」発足当初から年1～2回行われている，会員のリクレーションを兼ねた宿泊付き現地交流会の行事である。1～3泊の会員全体を対象とした行事としては今まで，長野県佐久地方の有機農業グループ「土と健康を守る会」[3]への，家族ぐるみの除草中心の援農，千葉県佐原市の公民館での現地農家との交流会，福島県西会津町の町役場あげての交流会[注1]などを実施した。その他一部の会員による同種の行事や日帰りの農作業，援農あるいは交流会等を多数実施している。

（1）目的

ツアーの目的は，リンゴ園で栽培中のリンゴの樹と果実に直接ふれることと，生産者とその「仕事場」で親しく交流することを通して，相互の信頼感を育むことである。リンゴなど果樹の生産は無農薬では不可能で，いわゆる減（低）農薬栽培となる[注2]。

従って，病虫害防除や雑草防除用の薬剤散布の実態に対する消費者の理解が不可欠である。

「いのくら屋」作製の本行事用のパンフレットには以下のように記述されている。

「秋になると店先においしいリンゴが並びます。このリンゴを作ってくれているのが気さくでネアカの畔上さん夫婦です。

リンゴ園で直接畔上さん夫婦と触れ合ってくだ

（問い合わせ先）〒338　埼玉県浦和市下大久保 255　埼玉大学教育学部技術教育講座　栽培学研究室

図１　リンゴの減農薬栽培と収穫方法の説明
上：鈴なりのリンゴを背に説明する畔上さん
下：真っ赤なリンゴのもぎ取り
注１：リンゴの果実を持ち上げるようにして，横へひねると枝に障害を与えずに簡単に収穫できる。葉摘みの結果，果実付近の枝には葉が少ない。

図２　収穫と賞味の風景
上：美味しそうなリンゴを収穫する小学生（３～４年生）
下：談笑しながらリンゴを丸ごと賞味する会員ら
注１：品種は「ふじ」で，冷夏であったが，秋に晴天が続いたため，やや軟らかかったほか，食味は比較的良好で，甘みも充分であった。

さい。あのリンゴの味の原点が分かることでしょう。

もう一つ大きな目的は会員の皆さんの交流。いのくら屋を通じての仲間ですが，お互いに知り合い大きな輪を作りましょう。」（原文どおり，以下の引用も同様－著者注）

（２）行程

行程等は以下の通りで，全コース観光バス[注3]を利用した。

11月13日

午前 6:00;いのくら屋近くの環状七号線沿いに集合（大森）。

午前 6:30;出発→練馬インター→嵐山ＰＡ（休憩）→佐久平インター→菅平（休憩）→須坂→リンゴ園

午後12:20～15:00;リンゴ園で畔上夫妻と交流，「ふじ」を中心としたリンゴ栽培の説明を受ける。この地域における一般の農薬散布回数の約半分に抑えた減農薬栽培の実態と，リンゴの収穫

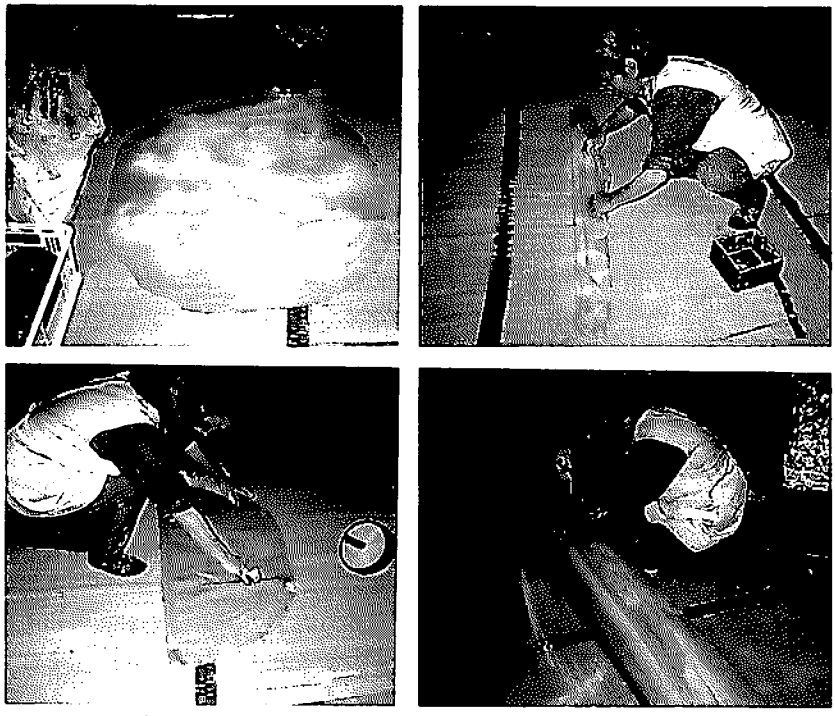

図3　そば打ちの様子

注1：出来上がったそばの生地を何層にも重ね，大きなまな板の上で，長方形のそば切り包丁で適度の幅に切る（左上，左下，右上，右下の順）。

方法について関心が集まった（図1）。そして，各人が収穫しながら，新鮮なリンゴを味わった（図2）。

その後，会員の一人が勤務先の工場で作ってきたステンレス製の焼肉用の網，器などを用いて放し飼いや自家配合飼料で育てた豚肉や有機野菜などによるバーベキューパーティを行った。畔上さんの奥さん手作りのおいしいけんちん汁と漬物も賞味できた。

午後15:30;民宿「はちのこ」到着。

目黒生まれの女将さんのそば打ちの実演（図3），子供中心の餅つきなどを行う。その後，女将さん，畔上夫妻，バスの運転手さんも参加して，酒を酌み交わしながら，口角沫をとばしての交流会となる。

11月14日

早朝散歩　山の朝の空気は都会と比べとてもおいしかった。

午前 7:30～8:30;朝食，男性の大人は夜遅くまでの議論を肴にした宴会で疲れ気味。食後，女性の大人中心に，昼食用のオニギリ作り。

午前 9:30;女将さん，畔上夫妻と娘さんに見送られながら出発。

「はちのこ」出発→須坂インター（中央高速）→諏訪ＰＡ（休憩）→甲府南インター→御代川

午後12:10～13:30;甲府に出張中の男性会員の案内で御代川岸に無事到着。子供達は水遊び。信玄堤の側で味噌汁を作って，オニギリで昼食。

午後13:30～18:20;御代川出発→甲府南インター→境川ＰＡ（休憩）→調布インター

→甲州街道→大原交差点→大森（解散）

（3）畔上さんと「はちのこ」

①畔上さんの紹介

畔上邦夫さんは42歳，のりこさんは41歳で，つなき君（高1），つばさ君（中1）及びしおみさん（小3）[注4]という3人の子供と，ご両親の7人家族である。「はちのこ」の女将は邦夫さんのことを「サラリーマンのような風貌の人だ」と言っていたが，とてもスマートな話上手で聞き上手の気さくな人である。のり子さんは，ほがらかで，しっかりした働き者で，ご両親と子供を含め明るいほのぼのとした一家を経営しているようであった。

畔上さんのリンゴ園は，眼下に千曲川とその周辺に広がる平地（千曲平）を見下ろし，妙高高原，斑尾山や黒姫山を遠望できる，見晴らしのよい緩斜面にある。南斜面なので，昼間は暖かく，日照時間も長く栽培環境は最良である。畔上さんも「地の利に感謝している」と述べている。また，この辺りの地名「夜間瀬」とは夜間の冷え込みにより夜露がたっぷりと降るとの意味があり，昼夜の寒暖の差が果樹栽培に適していることから，この地域一帯は古くから，リンゴ，ブドウ，モモなどの栽培が盛んであったとのことである。

北志賀は一年の半分は雪に覆われ，生活条件は厳しい地域である。しかし，ここを生産と生活の場とする畔上さんは，これからもリンゴとブドウ栽培を主とした専業農家として，堆肥作りと栽培方法を工夫しながら，「減農薬の安全な農産物を顔のみえる消費者に届けられる産直一本でやりたい」との強い思いをもってがんばっているのである。

リンゴ栽培は，春の摘花，秋の葉摘み[注5]等，家族総出で行う作業の積み重ねである。その全てが，最良の環境条件と合わさり，品種[注5]の遺伝的特性を充分に発現させて，おいしく，見栄えも良いリンゴが生産されるのである。「いのくら屋」作成のパンフレットは以下のように記述する。

「リンゴ園でもぎたてのリンゴの味をかみしめながら，畔上さんご夫婦，おじいちゃん，おばあちゃんの人柄も味わって下さい。」

また，交流会の話合いの中で「ぜひ，春の花咲く頃に来園してください」と，摘花の援農を依頼された。

②「はちのこ」とそこでの交流会

東京都目黒区生まれの女将さんが，御主人が亡くなってから一人で経営しているこじんまりとした民宿で，竜王ゲレンデスキー場近くの，連なる山々と豊かな自然にかこまれた宿である。冬はスキー場の客を泊めるそうだ。

この宿の最大の特徴は，泊り客にそば打ち体験をさせることだ。「北志賀ならではのもてなし，田舎体験」として始められたそうである。長野県は現在でもソバの栽培が盛んで，特産地を形成している。その子実をひいた粉を用いた信州そばは昔から有名である。なお，信州そばには種類が多く，ここ北志賀では「須賀川そば」と呼ばれる，つなぎに山ゴボウ[注7]の葉の繊維を利用したものが親しまれ，この宿でもこれを用いている。ソバ粉のほかは山ゴボウの葉のみで，地元の良質の水を使って，女将が手打ちしたそばは，歯ざわり，風味が良好で大変美味であった（図3）。原料のソバは女将が宿の裏にある自分の畑で，無農薬で栽培したとのことであった。

今回は参加者が多く，餅つきなどに時間がとられ，交流会を控え時間がなかったので，著者ら数人が女将の打ったそばを切る作業[注8]のみにとどめざるをえず，残念であった。次回はぜひ全ての作業を行ってみたいものだ。

交流会は女将さん，畔上夫婦，バスの運転手さんも参加して行われた。乾杯の後，大人全員が参加の理由，リンゴ園訪問の感想，「いのくら」への思いなどを含め，ユーモア一杯の自己紹介を行った。女将さん，畔上夫妻，バスの運転手さんもそれぞれの思いを披露した。畔上さんは「いままでいろいろな消費者との交流会を持ったが，だいたい全て女性のみで，今回のように大人の半数近くが男性の場合は初めてだ」と語ったのが印象深かった。自己紹介の後は，馬刺，天ぷら，漬物，ひじきなどを肴に，酒を酌み交わしながら，口角沫を

とばして，有機農業や無農薬栽培，減農薬栽培のこと，安全な食べ物や家族全体の食生活のこと，農業，さらに生活環境全般について隣同士で議論が続いた。最後に，前述のそばを食べて交流会は終了となったが，男性有志はいつもの例で，その後も果てしなく議論を続けた。

3.「リンゴ狩りツアー」参加者の概略等

今回の参加者は36名で，遠方のわりには多めの人数であった。週１回ずつの野菜類の配達[注9]の際の数回のチラシによる「秋のリンゴ狩りにいきませんか！そば打ち，露天風呂，バーベキューなど盛り沢山のイベント付きです」との呼びかけに応じたものである。盛りだくさんのわりには，費用が大人13,000円，子供10,000円と比較的安く，全コース，バス利用のせいとも思われるが，やはり「いつも食べているおいしい安全なリンゴは，どのような場所で，どういう人が，どのように栽培しているかを見てみたい」との思いがあったからであろう。

参加者の内訳は大人が22名，内男性10名，女性12名，子供が14名，内男子7名，女子7名[注10]であった。また，夫婦で参加が６組で，内子供も一緒の家族連れは５組であった。大人の職業は，大田区職員，教員，印刷業の自営者，技術系や事務系のサラリーマンなど多様で，このほか「いのくら屋」の職員の女性３名及び名目上の代表者の男性１名を含む。また，地方出身者も多く，東京育ちの人を含め比較的自然が豊かな地域や時代に幼少期を過ごした人が多い[注11]。

4．生産者との交流会

野菜，果物，米などの作況等の情報交換や，会員と生産者との親睦を図るために毎年開かれる恒例の「生産者との交流会」が1994年２月５日に，いのくら屋にほど近い大田区立新井宿会館で開催された。

当日はつなき君ら３人の子供連れの畔上夫妻のほか，福島県，長野県，栃木県，静岡県，千葉県などからの９名の生産者と，子供24名を含む78名の会員が参加した[注12]。

生産者による前年の作況等の報告の中で，畔上さんは北志賀の厳しい生活条件，堆肥作りの工夫，消費者の顔が見えることの喜びなどを上品なユーモアを交えて話された[注13]。続いて，昨年は冷夏のせいか，栽培する果樹[注14]一般に葉ダニなどの害虫は少なかったが，ブドウには灰色カビ病が，モモには様々な病気が多発した。しかし，収穫期前２～３週間に晴天が続いたためか，リンゴの病気は平年並みであったこと，リンゴの味は，早生の「つがる」などは長雨の影響で不良であったが，「ふじ」は平年並みであったことなどを話された。最後に，スライドを用いて，リンゴの結果習性や，冬のせん定，春の摘花，秋の葉摘み及び収穫等の諸作業，反射シートによる光合成の増進と着色促進効果などについて話され，春の摘花，秋の葉摘みの援農の要請を行い話を終えられた。

交流会に引き続いて，会員有志が準備した有機野菜等を用いた手料理を肴に，懇親会が盛大に行われた。その中で，米のミニマムアクセス後に予想される自由化のこと，堆肥作りの苦労，無農薬や減農薬栽培に対する周辺農家の圧力，アトピーの増加への農薬等の化学物質の寄与率，あるいは景気悪化の有機農産物利用志向への影響等について延々と議論が続いた。閉会後，生産者と会員の有志が二次会で，再度議論を続けた。

5．考察

松尾はヒト以外の生きものを栽培・飼育することを農耕と定義，この農耕を猟（か）るあるいは育てるの，いづれの思想で行うかによりそれぞれ農業あるいは農芸と呼ぶことを提唱し，人間は猟る思想と育てる思想とを合わせもって創造的に行動する動物であるが，近年，育てる思想の欠如が校内暴力・盗難などの問題行動と関わりあっていることを示唆し，育てる農耕すなわち農芸教育の重要性を指摘した[5,6,7]。

一般的には「リンゴ狩り」などは観光農業として位置づけられ，このような行事だけを単独に行うならば，まさに猟る農耕（農業）[6]の典型と言えよう。しかし，今回の行事のように，「いつも食べているおいしく安全なリンゴは，どこで，誰

が，どのように栽培しているかを見てみたい」との思いを持った現地交流会として行い，しかも千葉県佐原市の水田を借りた無農薬栽培の稲作りや，様々な援農などと合わせて行っている「いのくら」の場合は，猟る農耕に留まらない。

今回のリンゴ狩りは，家族ぐるみや親子連れで参加したグループが多く，リンゴ園などで親子揃って，あるいは友達同士で楽しそうにリンゴをもぎ取ったり，はしゃぎまわる子供達の姿がみられた。このような光景をみると，農村や農業の価値が再認識される。

ところで，農作業や農村の景観・雰囲気などを子供達はどのように感じているのだろうか。前述した，佐久地方の「土と健康を守る会」を主な購入先にしていた時期に，除草中心の援農と遊びを目的とした，家族ぐるみの「子ども合宿」に参加した子供達は次のような文章を残している[注15]。真夏の晴天時に，長時間の除草作業であったためか足腰の痛みなどを訴える子ども達が多いが，農家の苦労の一端を体験できたと思われる。また，農村の豊かな自然を十分に体感している様子がうかがえる。

「はちいやだった。トンボがあんなにいると思わなかった。畑仕事はもうしたくない。」（小学1年・女子）

「はじめてのはたけしごとをしました。はこべをとります。にんじんのはっぱをとらないではこべをとります。…ミミズがきらいなのでミミズがいないところでやりました。こしや足がいたくなりました。」（小学2年・女子，…の箇所を一部省略，他は原文通り，以下も同様）

「アメンボとりなどして川遊びがいちばん楽しかった。あんな所に別荘をつくりたい。草とりがたいへんだった。。けど，お百姓さんの苦労がよくわかった。」（小学2年・女子）

「…くさとりのときずっとしゃがんでいたのでこしがいたかったです。…くさとりをしてよかったなと思いました。」（小学3年・女子）

「…女の子たちは一生けんめいしてたよ。小さいにんじん畑の草はひっぱってもとれた。畑の中にかなぶんがいた。…」（小学3年・男子）

「長野に来ると，いつもとても早く目がさめます。水がとても冷たくて，顔を洗うといい気持ちです。にんじん畑の草むしりをやって，まちがえてにんじんをぬいてしまって，あわててうめました。草むしりは，友達としゃべりながらやっていたので楽しかったけど，こしがいたくなりました。毎日やってる農業の人は，大変だなあって思いました。…」（小学6年・女子）

「…これは，たとえ何回やっても好きになれそうにないと思いながらも，私ははりきっていました。土に朝つゆのついた，ドロだらけの手で，にんじんの葉をむしらないようにと思いながら一生けん命に，雑草だけを根元からひっこぬくのは疲れます。また，同じ場所で草むしりに熱中していると足がしびれてきますから，移動するのがたいへんです。…二度とやりたくないと思いました。…」（小学6年・女子）

有機農業は消費者からみた場合，有機野菜等の利用を通して，食べものから生活を見つめ直す運動である。一方，生産者からみれば，現代（近代，慣行）農法への対案であり，土壌が本来保持している生産力を助長，作物が健全に生育する場合が多いことから，その耐病・虫性が充分発揮され，無農薬栽培[注16]が可能となる環境保全型の農業である[3]。さらに，この農業は生産者にとっては正に生業であり，生きる手段であることが最も重要な点である。従って，両者は徹底的に話合い，理解し信頼感を保持し合うことが必須である。それなくしては地理的に遠く離れた両者が「本当に無・減農薬栽培なのかしら?」，「将来とも購入を続けてくれるだろうか？ 消費者は本当はどんな農産物を求めているのだろうか?」等々の疑問を解消できないと思われる。このことから，前述したような，生産地や消費地での交流会や，そこでの徹底的な議論がぜひとも必要となってくる。

今回取り上げた交流会の場合も，消費者から生産者へは，「援農や無・減農薬栽培の稲作りの中から，農家の苦労，とりわけ除草の大変さが親子ぐるみで実感されたこと，天日乾燥，自己精米の米が，おかずが不用なほどに食味が良いことを家族中で体験したことなど[3]」が伝えられ，生産者

のやる気や生きがいを助長するころができたと思われる。一方，生産者から消費者へは，「食糧管理法が消費者にも有益な面が多いこと，微生物を利用した「ボカシ」[1]が堆肥製造に便利なこと，冷害は数年続くことが多いこと，豚や鶏の多頭飼育には抗生物質が多用されていることなど」が伝えられ，農政や農業技術，さらには食生活の問題点が浮き彫りにされ，現代文明の中で消費者が安全な食生活を営むことの難しさと，このような活動の価値が再認識されたと思われる。

注

注 1) 山田裕通氏によると，「東京の消費者団体の一行が，農産物の買い付けにきた。」ということで，最近まで使われていた，積雪のため登校不可能な遠隔地在住の生徒向けの冬季用宿舎を特別に使用させてくれたり，町役場の職員一名が専任で担当者となり，様々な世話をしてくれ，さらには町長をはじめ，助役以下の職員や町の有力者も参加する野外パーティや，ヤマメのつかみどりなどを企画してくれたとのことであった。中山間地にある自治体の村興し対策の一環として取り組まれたようである。

注 2) 農水省は1993年4月1日から「有機農産物等に係わる青果物等特別表示ガイドライン（指針）を実施したが[3]，化学合成農薬の使用回数が，その地域での慣行の半数以下の場合，減農薬栽培農産物の名称を使用できる。

注 3) 50代の地方出身の運転手による個人営業のサロンカー風の観光バスで，添乗者はなしだが，費用は市価の約半値であった。気さくな運転手さんで，特別なコースを快く通過してくれたほか，交流会の一部にも参加し，発言された。

注 4) 当時の年齢及び学年。

注 5) 葉摘みは，リンゴ果実周辺の葉によって太陽光線が遮られることによる，果皮（主として果柄着生部方向の果実表面）の着色不良による品質低下を防止するための作業。しかし，葉摘み（摘葉）は樹個体の光合成を低下させる。とりわけ，果実着生部付近の葉の役割は大きいと思われるので，果実表面の着色不均一に消費者がこだわらなければ，甘みを中心とした食味向上と省力のため，不摘葉が望ましい。今後の課題となろう。

注 6) リンゴの品種は多様であるが，長野県では「ふじ」，「デリシャス系」，「つがる」，「紅玉」などの栽培が多い[9]。最近，「紅玉」は酸味が強いとの理由で減少が著しいとのことである。

注 7) 山ゴボウ；やまごぼう（Phytolacca esculenta Van Houtt.）　人家に植えられ，時に野生化するヤマゴボウ科の多年草。根は有毒であるが，薬用となり，葉は煮て食べられる。「ゴボウ」に似た根を持つことから名付けられた[4]。

注 8) 何層にも重ねたそばの生地を長方形のそば切り包丁で適度の幅に切る。初めての体験であったが，練習すれば子供でもかなりの程度，上達すると思われた。

注 9) 共同購入の人（いのくらの会員で，希望者）には，週1回づつ，所有のバンを用いて野菜などを配達する[3]。配達料は最近，1回200円に値上げとなった。なお，共働きの家庭の場合，定期的に門口まで配達してくれるシステムはかなり便利なようである。今のところは，このシステムの便利さのみで会員となる人は認められないが，今後の課題の一つとなろう。

注10) 参加者の内，大人6名は「いのくら屋」にほど近い，「馬込共同保育所」の関係者，子供3名は大森ジャングル探検隊[2]出身者で，いずれも遊びの達人である。

注11) 参加者への原体験[10,11]アンケートの結果では，ゼロ・動物・草・木・土・石・火・水・雪・氷の各体験とも豊富な人が多かった。なお，動物体験と草体験については，男性は前者が，女性は後者がより豊富な傾向が認められた。

注12) 生産者には「いのくら」から交通費の一部が支払われるとともに，遠方の人は会員の家に分かれて宿泊し，さらに家族ぐるみで交流する。

注13) 無・減農薬栽培の米や有機栽培のイチゴ，減農薬栽培のミカン，有機栽培の多種類の野菜等を供給してくれる農家あるいは，自家配合飼料で放し飼いした豚や鶏の肉を供給してくれる脱サラの畜産農家などの話の後，奥さんと3人の子供の見守る中，畔上さんの話となった。なお，つなき君の学校は休校日であったが，つばさ君としおみさんは両親の仕事に関係が深い行事ということで，所属校の先生から許可を得て参加したとのこと。

注14) リンゴは「ふじ」100アール，「つがる」10アール，その他若干，ブドウは「巨峰」35アール，モモは各種合わせて35アール，その他ナシを若干栽培しているとのことである。

注15) 「いのくらつうしん No.1」(1986.8.25) 掲載の文章より抜粋。

注16) 無農薬あるいは減農薬栽培は，一般に消費者サイドのみから論じられる場合が多いが，生産者からみると，化学合成農薬の惨禍から自らの心身を保護することの意味が大きいものと思われる[8]。

参考文献

1) 比嘉照夫 1991.微生物の農業利用と環境保全。農文協，東京。
2) 石田康幸 1991.大都市における幼児の野外教育ー大森ジャングル探検隊ー環境教育。1(2):48-55.
3) 石田康幸 1994.食と農を通しての環境教育(1)ー大都市における市民活動の一例ー。環境教育。3(2):55-61.
4) 牧野富太郎 1972.新日本植物図鑑。北隆館，22版，pp.137，東京。
5) 松尾英輔 1986.農芸教育の提唱(1)ー農耕を通して行う教育：農業教育と農芸教育。日本農業教育学会誌。17(2):1-5.
6) 松尾英輔 1990.農芸教育の提唱(2)ー今農芸教育はなぜ必要かー。日本農業教育学会誌。21(1):19-24.
7) 松尾英輔 1990.農芸教育の提唱(3)ー農芸教育は行われているかー。日本農業教育学会誌。21(1):25-30.
8) 大平博四 1981.有機農業の農園。健友館，東京。
9) 佐藤公一他編 1986.果樹園芸大事典，養賢堂，第二次訂正追補後の第6版，pp418-421，東京。
10) 山田卓三編 1990.ふるさとを感じる遊び事典。農文協，東京。
11) 山田卓三 1993.生物学からみた子育て。裳華房，東京。